

# 鉄と色系の無限大の可能性を探る 旅へ

4月号からの表紙は美術家(染・織)の辻 けいさんが飾ります。



メキシコでのフィールド・ワーク・インスタレーション 「染織した糸2001」 撮影/辻けい

**自**ら染めた糸や布をさまざまな自然の中に置いてみる。美術家(染・織)の辻けいさんの作品は、自己(染色した布)と時空(自然界の原理)との関わりを探求し、「フィールド・ワーク」の概念を用いて生み出される。その根底には、環境との調和を意識し、物質はいつしか自然の中に溶け、再び甦るといった思いが込められている。辻さんは、次のような手法で作品に取り組んでいる。

**天**然染色し、織り上げた糸を、川に流す。それらは、川の流れに従って動き、自然の造形を表す。川の水に含まれている鉄分の含有率などによって微妙な色の変化を起こし、清流と一体化した生命が吹き込まれ、予期しない新たな作品が生まれる。

**現**在、さまざまな色が私たちの身边にあふれているが、染織は原始の人々が大地の恵みから一つ一つ色を導き出してきたものだ。太古から人類の文化を支えてきた鉄もまた、染織の世界で染めた色を安定させる媒染剤として重要な役割を果たしてきた。

**大**地と人々との深い関わりを持つ「鉄」と「染織」のコラボレーション。それが今回の新シリーズのメインテーマである。初めての試みについて、辻さんは「鉄と色系の無限大の可能性を探る 旅」と位置づけている。

これから2年間、20回の連載を予定しています。どのような旅の軌跡が表現されていくか、ぜひご期待下さい。

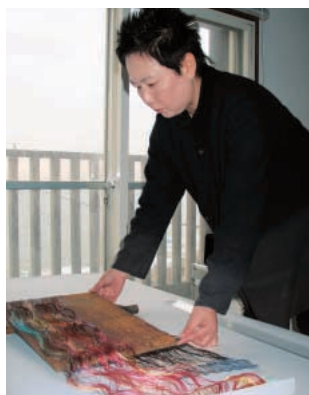


「金津 円」(福井 2002年) 撮影/辻けい

炭化した間伐材228本を沼の中に波紋をおこす装置とともに設置した作品。沼の水を浄化するピオ・トープの役割も果たしている。

インスタレーション：作品と展示空間が必然的な結びつきを持つような環境に展示し、空間全体を作品とする手法。

媒染剤：染料と繊維を媒介して固着させる物質。タンニン剤、鉄、クロム、アルミニウムなどの金属塩。



神奈川県鎌倉市・稲村ヶ崎のアトリエにて

## プロフィール 辻 けい(つじ・けい)

東京都生まれ。1979年、多摩美術大学大学院美術研究科修了。深層心理を分析した空間構成の作品「夢中遊行」シリーズを81年より発表。86年より染と織を主体に世界各地の砂漠、森、水辺を訪ね、「フィールド・ワーク」によるインスタレーションを展開。2001年、「ヘルシンキ・テレー湾プロジェクト」に参画した8人の作家たち展、「アクションズ8848」で野口健清掃登山隊が持ち帰ったゴミ(酸素ボンベ)の再生アートを担当。辻さんの母校・桐朋小学校で収録された「課外授業 ようこそ先輩」(NHK)にも出演するなど幅広く活躍中。



ピリカ川でのフィールド・ワーク(北海道 2003年7月) 撮影/辻けい